コミュニケーション論講義（3）

An Introduction to the Study of Communication（3）

岩　本　一　善

（第53号より続き）

２－１．言語と伝達、思考、自意識（補足②：パースによる「言語なき思考」の否定）

前節で、言語を一度獲得してしまった人間には「言語なき思考は不可能」であるということを確認しておいたが、それは言語によらない思考が存在し得ないということとはイクォールではないことは強調しておかなければならない。言語は思考それ自体ではないが、一度言語を獲得した人間にとっては、言語という記号なしに（思考の）要素を指し示すことはできない。言語の網の目からこぼれ落ちるような、未だ言葉では言い表せないような何物かは、文字通り「言語では言い表せないような何物か」とレイベリングされるよりほかない。言葉を換えれば、そのようにレイベリングされることによって初めて「言語では言い表せないような何物か」は思考の対象となり得る。したがって、言語という記号なしにそれらを操作すること、つまり思考することは、言語を獲得した人間にはもはや不可能であるという立場をわれわれは採る。では一方で、言語の網の目によって掬い取られなかった何物かは、私たちの認識の対象からも抜け落ちてしまうことになるのだろうか。われわれはここではそのような立場を採らないが、これについては次節にて述べることとする。

２－２．言語（コトバ）記号の構成と特質

私たちが他者（または自分自身と）コミュニケーションを取り交わすとき、言語（コトバ）記号が大きな役割を果たしているらしいことは確かであろう。人と人とのコミュニケーションにおいて、身振り（ジェスチャー）のような言語以前にも使用されていたであろうコミュニケーション手段が、言語を獲得した後にも重要な位置を占めていることは再三にわたって指摘されてきた。たとえば「動作学（kinesics）」の創始者として知られるバードウィステル（Birdwhistel, R.）は、「仮の統計値に基づく当面の予想としては、会話またはその他の相互的な行為によって取り交わされる社会的意味のうち、おそらく30～35％以上は言葉によって伝えられているであろう（Our present guess in that in pseudostatistics probably more than 30 to 35 per cent of a conversation or an interaction is carried by the words.）」[(1)(2)] としている。言葉を

換えればそれは、最大限見積もっても65～70％の社会的意味は言語以外の手段によって取り交わされている、ということでもある。またトマセロ（Tomasello, M.）は、種としてのヒトが、言語獲得の以前に、他の個体となんらかの情報を共有することで協力してことにあたろうという明確な意図をもってジェスチャーを表出したということ、それこそが人間のコミュニケーションにおいては言語の使用をはるかに凌駕する臨界点であったと指摘している[(3)]。

特に後者の指摘は重要である。ジェスチャーには、たとえば「指で対象を指し示す」などの直示的（deictic）なものと、日本語話者がOKサインを下向きにすることで金銭を表わす場合のような慣習的（conventional）なものとがある。この両者の違いは非常に大きい。直示的なジェスチャーの理解には、背景的知識も言語も必要ない。伝え手が、受け手に関心を向けてほしいと思った対象を指し示めし、その行為を受け手が認識するだけで、伝え手の意図を受け手に伝達することができる。一方、慣習的なジェスチャーについては、言語と同様、それ自体またはそのシステムのみから直接その意味を引き出してくることは不可能であるからだ。この違いを考慮に入れると、「コミュニケーションの参与者は誰なのか」、「彼らは互いの間に共有されている背景的知識をどのようなものであると想定しているのか」等々といった、「コンテクスト（context）」に関する情報がその理解に不可欠である慣習的なジェスチャーが、言語に先立ちそれを生み出すドライヴになっていたのではないかという指摘は傾聴に価する。なお、下向きのOKサインは硬貨の形状を指で表わしたものであるから、言語におけるオノマトペ（onomatopoeia）と同様、それが指し示している対象とアナロジカル（iconic）な関係をもった記号なのではないかという考え方もある。しかしわれわれは、オノマトペも含めて、一見すると対象とアナロジカルな関係をもっているかのようにみえる記号も、身体またはそれ以外のものを使って対象を直接的に指し示すジェスチャー以外は、すべて慣習的なものであると考える。こちらについても、次節で詳しく述べることにする。

いずれにせよ、われわれはここで、人間のコミュニケーションをそれ以外の生物と決定的に異なるものにしているもの、人間のコミュニケーションおいて核となるものは言語であるという立場を採る。

ところで、やや横議に過ぎる嫌いはあるかもしれないが、ここでわれわれがコミュニケーションについて述べるにあたって、なぜその実践的（practical）な運用、つまり自分の意図を効率的に相手に伝えるためのノウハウや、相手の言動の裡に意図的または非意図的に隠されたメッセイジを読み解く技法についてなどではなく、ほぼ専らその理屈（theoretical）について対象を限定しているのかについて触れておくことにする。

人と人との間にコミュニケーションが取り交わされているというのは、どのような状態であると説明できるのか。またそのような状態を可能にするためには、どのような手段と条件とが必要とされるのか。そしてそれを妨げる要因としては、どのようなものが想定されるのか。こ

のような、人間のコミュニケーションを成り立たせている諸々の要素やその働きについて考えることは「理屈」に属するものであろう。これを自動車の使用にたとえてみると、自動車の動力源である内燃機関の構造であるとか、そこで発生した動力をどのように効率よく伝達するのか、またどのような機構によって自動車の動きを制御するのか等々といった、いわば工学的な課題が、これらの「理屈」、つまり理論に相当するものとなるであろう。それに対して、たとえば交通規則の理解であるとか、運転のテクニックやマナーを向上させるなどといった実用的な知識と技術は、自国語はもちろんのこと外国語の習熟に努めたり、それぞれの言語や文化に固有の習慣を理解するといった、いわば円滑なコミュニケーションをすすめるための技術や方法に相当するものとなるであろう。

周知のように、今日に一般的に流通している自動車を使用するのに、たとえばエンジンの構造などといった工学的な知識についてまったく無知であったところで、不都合が生じるなどといった事態はほとんどない。ということは、ここで取り扱おうとしているコミュニケーションの理屈に相当する知識についてなどまったく意に介さなかったところで、私たちが日常生活においてコミュニケーションを取り交わす際に差し障りが生じるなどということもまずもってないということだ。むしろ日常生活を送るうえでは、先にあげた実用的な知識と技術についての知識をもっていることのほうがはるかに有用となることであろう。

実際、人と人とがコミュニケーションを取り交わしているという事実がはるか昔の彼方から所与の前提となっている段階、つまり現在の私たちがおかれている状況の下では、コミュニケーションに関する実用的な知識と技術の研究が非常に有益かつ重要なものとなっていることは言を俟たない。それでもここでわれわれは、「すでにそうなっている」ことを「なぜそうなっているのか」と問い質そうとすること、序言においても述べた「人が時として自覚的、また時として非自覚的にその概念を自らの言動で具現しながら、一方でその内容や定義の説明を求められると途端に返答に窮してしまうような」ものについて考えることが、無益なことであるとは思えないのである。私たちが日々、もはや当たり前にそこにあるものとしてその恩恵を受けている科学技術の所産は、一般人、つまり私たちの大部分にとっては、機能と使用法はわかっているものの、その構造についてはまったく無知である、そして通常はそうであったとしても、私たちの日常生活になんの支障もきたすことはないという意味でブラックボックスであるといえる。言語は、「人が作り出したもの」という点では文明、科学技術の所産と同様であるが、それらを生み出すドライヴとなったという点では、後者よりもいっそう根源的なものといえるだろう。そのようなものを、専門的な研究者だけではなく、学生諸兄姉もそこに含まれる私たち一般人（laypersons）が可能な範囲でできるかぎり理解しようとすることは、たとえ即時的にではなかったとしても、必ずや私たちにとって有意義なものとなるはずなのである。

さて、言語（コトバ）記号の特質についてである。以下、言語（コトバ）記号については、

「コトバ記号」とだけ表記することにする。まず言語学者のオグデン＆リチャーズ（Ogden & Richrads）は、コトバ記号と事物との関係を三角形で表わしている（fig. 1）[4]。

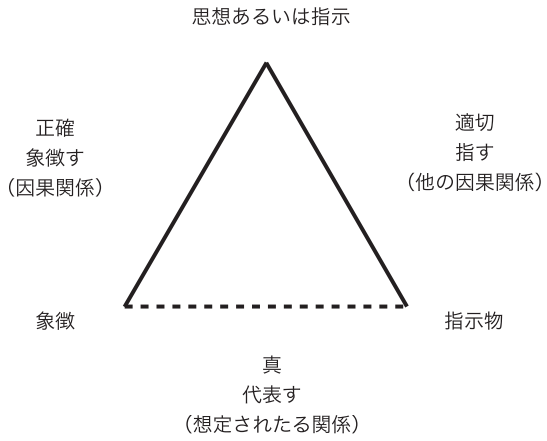

fig.1　⑷をもとに引用者が作成

それぞれ原語をあげておくと、３つの頂点は「象徴（symbol）」「思想あるいは指示（thought or reference）」「指示物（referent）」となり、３辺は「象徴す（symbolizes）、因果関係（a causal relations）、正確（correct）」「指す（refers to）、他の因果関係（other causal relations）、適切（adequate）」「代表す（stands for）、想定されたる関係（an imputed relations）、真（true）」となる。

この、一般に「オグデン＆リチャーズの意味の三角形」と呼ばれる図が意味していることは以下の通りである。彼らの言う「象徴」とは、物質としてのコトバ記号それ自体の謂であるが、その「象徴」の解釈者である私たちが、たとえば「ネコ」という音を聴き取る（または読み取る）とき、過去の経験や記憶（または今現在おかれている状況）などから「因果関係」によって結びつけられた「ネコ」という概念の心的なイメージ（思想あるいは指示）が意識の中に浮かび上がる（＝象徴する［symbolizes］）。そしてその心的なイメージは、それが指し示している（＝指す［refers to］）対象（指示物）との間にも「他の因果関係」にある。「他の因果関係」とは理解しにくい表現であるが、「オグデン＆リチャーズの意味の三角形」をより理解しやすいものに改変したチェリー（Cherry, C.）によれば、その関係とはコトバ記号が指し示している対象が私たちの感覚器官によって認識されるという物理的な因果関係のことであるようだ（fig. 2）[5]。

そしてここで認識される対象は、たとえば「たった今、目の前を横切ったネコ」といったように、より直接的に知覚されるものである場合と、たとえば「『長靴をはいた猫』のネコ」といったように、より間接的に想起されるものである場合とがあり得る。では、「ネコ」という音（＝象徴）と、それが指し示している対象である「ネコ」（＝指示物）との関係はどうなっているのだろうか。それらを結ぶ関係は、オグデン＆リチャーズの図においても、チェリーの図においても、実線ではなく点線で表されている。オグデン＆リチャーズによれば、その関係が破線で表されていることが意味するのは、「象徴」と「指示物」との関係は、私たちが「象徴」を解釈することによって喚起される心的なイメージが媒介となって結びつけられる間接的な関係であるということである。つまりその関係は、私たちが「象徴」を文字通り象徴化させる、つまり「象徴」が喚起する心的なイメージを「象徴」と結びつけることによって、さらに

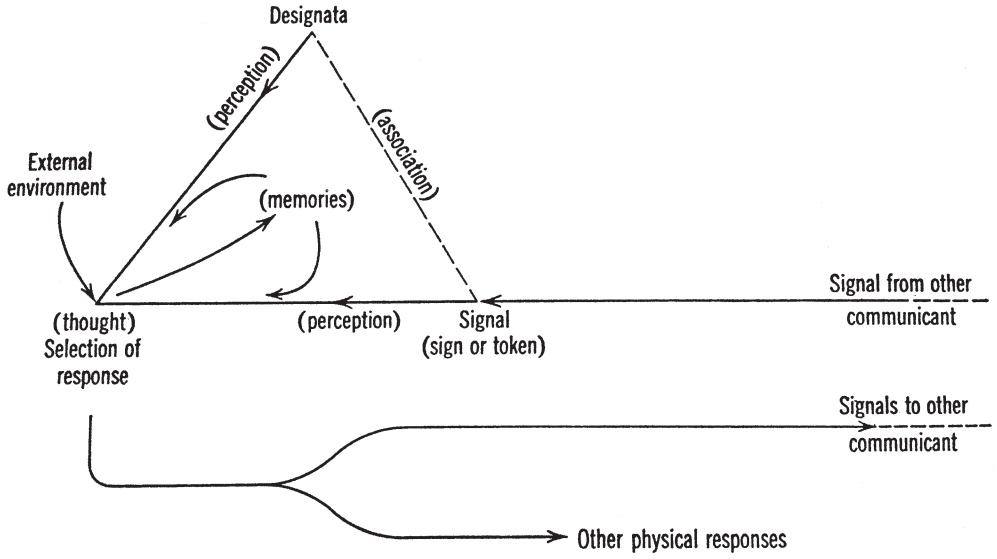

fig.2

そのイメージがこれもまた文字通り指し示している対象である「指示物」と結びつけられたことによるものであるから、心的イメージを介在させない「象徴」と「指示物」との関係には本質的、直接的な関係は存在しない、ということである[6]。

この「オグデン＆リチャーズの意味の三角形」は、コトバ記号と事物との関係を表したものであったから、「象徴」と「指示物」との間には直接的な関係は存在しない一方で、「象徴」によって喚起される心的イメージ（思想あるいは指示）と「指示物」との間には確かに物理的な因果関係があるとする説明は理解できる。コトバ記号の外側にある何事かをまったく指し示すことのない記号など、コトバとしての役割を果たせないだろうからだ。またこの三角形で説明された関係を逆向きから辿ること、すなわち「指示物」を知覚、または想起することによって喚起される心的イメージが、それに結びつけられた「象徴」を表すという経験は日常生活の中では頻繁に起こっていることだからである。たとえば、足の爪先を家具の角にぶつけて反射的に「痛ッ！」と叫ぶこと、空から水滴が頭のてっぺんに降ってきたのを感じて「おや、雨だな」とつぶやくこと、それについて人に伝えたいのにどうしてもその名前が思い出せずに四苦八苦していたのを「あぁ、殿山泰司だ！」とふっと思い出すこと…。しかし、これらの経験は決してプライマリーな経験ではあり得ない。その「象徴」が属する言語を獲得して習慣的に使用するようになってから後にはじめて経験される、セカンダリーなものであるはずなのだ。すると、果たしてコトバ記号は本当にその「指示対象」と少なくとも根源的に因果関係によって結びつけられるものなのだろうかという疑問がわき起こってくる。

この疑問について考えるためにも、ここでもう一度チェリーの図についても説明しておくことにする（fig. 2）。チェリーにおいては、オグデン＆リチャーズによる用語がそれぞれ、「象

徴」は「シグナル（Signal）」、「思想あるいは指示」は「反応の選択（Selection of response）」、「指示物（referent）」は「指示対象（Designata）」と言い換えられている。しかしチェリーも、オグデン＆リチャーズと同様、「シグナル」と「指示対象」の間の真の関係は三角形の他の二辺、すなわち「シグナル：反応の選択」「反応の選択：指示対象」を経由する、としている。そして、人間のコミュニケーションにおける「意味」について考えるには、「指示対象」と「シグナル」とが「反応の選択（思考）」で結ばれる頂点にいる「コトバ記号の使用者」、つまり私たち一人一人の人間という存在を考慮に入れる必要があるとしている。なぜなら、「反応の選択（思考）」を介して「指示対象」と「シグナル」とが結びつけられる過程は個人の経験に左右される要素が大きいからであり、一般化された「意味」だけではなく、ある特定の個人にとっての意味について取り上げる「語用論（pragmatism）」についても視野におさめておくべきである、とされる[7]。チェリーの図において、「外部環境（External environment）」が、「シグナル」「指示対象」のいずれに対しても直接的にはつながっておらず、その両者の関係を取り結ぶ「反応の選択（思考）」と結合していることの意味は、そこにあるようだ。そしてそれは、ある「信号」にそれ自体とは別の「指示対象」を表示する機能を持たせる、私たちがある「指示対象」を知覚または想起したときに心的イメージを介してそれ自体とは別の「信号」を思い浮かべる、そのようなプロセスには「信号」と「指示対象」との直接的・物理的なもの以外の関係があることを含意するのではないだろうか[8]。

２－２－１．言語（コトバ）記号の随意性

そこで次に、言語学者ソシュール（Saussure, F. de）によって提示された、見かけ上は「意味の三角形」に比べてはるかにシンプルなモデルについて考えてみる。周知のようにソシュールは、コトバ記号は「心的な概念」と「聴覚イメージ」とから構成されるものとして、それぞれに「シニフィアン（significant/signifying）」と「シニフィエ（signifié/signified）」という用語をあてた[9][10]。一般的にはそれらは、それぞれコトバ記号の物理的な側面、音などの外形それ自体としての記号と、そこに結びつけられた概念のことであると捉えられがちなのだが、ソシュールによればそうではない。コトバ記号は「二つのとても異なるものが頭の中で結びついた上にあるものです。その二つのものは、心理的なもので、主体の中にあるものです。聴覚イメージが概念と結びつけられているのです。聴覚イメージは物理的な音ではなく、心理的な音の刻印です」[11] とされる。「聴覚イメージは心理的な音の刻印」という表現はわかりにくいが、要するにある言語を獲得してしまった後には、たとえば「ネコ」という物理的な音がなくても、「ネコ」という音の記憶が「概念」と結びつけられているということなのだろう。

そしてこの「シニフィアン」と「シニフィエ」との結びつきは、根源的に「随意（恣意）的（arbitraire/arbitrariness）」なものであるとされる[12][13]。このコトバ記号の「随意性」のもっとも皮相的な解釈は、「ある物とその名前との結びつきは、それ以外の組み合わせなどあり得ない絶

対的なものではない、物の名前は言語によって異なる」というものである。私たちが日本語で「ネコ」と呼ぶあの動物を、他の言語を使用する人たちは［cat］と呼んだり、［gato］やら［katze］と呼んだりするらしい、ということだ。実はわれわれには、このもっとも皮相的であるとされる素朴な解釈も非常に重要な問題であるように思えるのだが、それについては機会を改めて述べることにする。

いずれにせよソシュールのいう「随意性」とは、「シニフィアン」がそれに結びつけられた「シニフィエ」を、「聴覚イメージ」がそれに結びつけられた「概念」を喚起する関係という、いわば「タテのつながり（↑）」だけではなく、あるコトバ記号が他のコトバ記号との関係においてもつ「価値」、よりシンプルに表現するならあるコトバ記号がカヴァーする概念の領域が「随意的」であるという、いわば「ヨコのつながり（←→）」についてでもあった。ソシュール自身があげた例で言えば、たとえばフランス語の「mutton のような語を取り上げると、それは英語の sheep と同じ価値」は持たない。「なぜなら、sheep は、テーブルの上にのった羊の肉ではなく、歩いている羊について話すときに使う」[10] からだ、とされる。また、しばしば取り上げられる例として、「虹は何色か？」というものがある。私たち日本語話者にとって、虹は７色であるというのはごく常識的な知識であり、また客観的にも虹は７色で構成されているはずだという思い込みがある。しかし実際には虹（と太陽光線のスペクトル）は紫から赤にかけて切れ目なく連続的に変化する可視光線から構成されている。だから虹を何色に見るかは、当該の言語における色彩の語彙とその社会における慣習による。実際、私たちが虹を「赤、橙、黄、緑、青、藍」の七色に見るのは、ニュートン（Newton, Sir Issac）の研究をひいた学校教育の賜物であるという説もある。一般的な英語話者はこれを［red, orange, yellow, green, blue, purple］の６色に見るとされるし、言語によってはこれを３色、または「明、暗」の２色とするものまであるという。もちろんこれは、たとえば虹を３色に見る言語の話者は、６色に見る言語の話者に比べて色彩を弁別する能力が劣るということではない。実際に、虹を３色に見る言語の話者が、６色に見る話者がそのコトバ記号によって弁別する色彩の違いを認識できないということはないことが明らかにされている。だから、ソシュールによるコトバ記号の「随意性」とは、私たちの感覚器官によって識別される認識ゲシュタルトと、ある特定の言語が切り分ける世界の境界とは一致せず、後者はその根拠を言語外の現実には見出すことができない「随意的」なものであるということである。

言語の起源がいまだ科学的に明らかになっていない以上、ソシュールがコトバ記号をそのようなものとして説明したことは科学者として妥当なことであったように思える。「すでにそうなっている」言語システムを現在手に入る材料から考察するならば、コトバ記号を構成する「シニフィアン」と「シニフィエ」とのリンクは「随意的」なものであるとせざるを得ないかもしれない。ごくシンプルな理由を一つだけあげておくと、私たちにとって現実の「世界」は一つしかないと考えられるのに対して、世界中には数千という桁の種類の自然言語が存在する

らしいからである。またそのリンクが「随意的」なものであるとするならば、コトバ記号は物理的な音／形をもった実体というより専ら心的なものであるとしておくほうがよい。コトバ記号を物理的な音／形という形態をもつ実体であるとしてしまえば、そのような形態をもつにいたった原因と過程を説明せざるを得なくなるからだ。ところが現状においては、そのような原因と過程について説明する材料はないように思える。しかし物理的な実体をまったくもたないコトバ記号や、コトバ記号の外側にある何事かをまったく指し示すことのない記号など、コトバとしての役割を果たせないはずであるから、現に私たちの使う言語、コトバ記号も確かに何事かを指し示し、「意味」しているはずなのである。オグデン＆リチャーズによる、ソシュールのコトバ記号においては「意味される事物（指示物）」という実体が欠けているという批判は、その点をついたものであろう。われわれがここで、ソシュールによるコトバ記号の「随意性」とは言語システムを合理的に説明するために已むなく方便として採り入れられた概念であったとしてしまったら、ソシュールの思想をあまりにも逸脱した誤読なのであろうか。

しかし、日本の代表的なソシュール論者である丸山圭三郎は、言語による世界の弁別という「この分節の尺度は、その基盤を言語外現実の中には（たとえ潜在的にも）一切有していない。この意味においてのみ、シーニュはまったく恣意的なのである。そうして、この恣意性こそ、自然と文化をへだてる唯一の特質」[15] であるとする。そうであるとするならば、コトバ記号によって「言い別け」られる以前から世界の境界があらかじめ弁別されていたわけではない、世界にはコトバ記号以前の境界線など存在しなかった、ということになってしまうのではないか。言い方を換えれば、コトバ記号のみが世界を「意味」あるものに切り拓いていくのであり、したがって、たとえばコウモリの「世界」と人間の「世界」とがその感覚器官の機能の違いによって決定的に異なっているように、話す言語が違えば「世界」の受け取り方も決定的に異なってしまう、ということになってしまうのではないか。前節においてわれわれは「いったん言語を獲得した人間にとって、言語によらない思考は不可能である」ことを確認したばかりである。ということは、ある言語を第一言語として獲得してしまうことにより、たとえば英語話者と日本語話者との間には、たとえば［cow］［beef］と、それに対応する「牛」という語の間に、越えられない翻訳不可能性が残るということになってしまうのだろうか。われわれにはそのような極端な言語決定説（linguistic determinism）は、コトバ記号と言語システムの自律性、言語文化の多様性や相対性を強調しすぎるあまりの贔屓の引き倒しに思える。［cow］［beef］と「牛」の関係でいえば、世界はコトバで弁別される以前に、種としてのヒトの感覚器官に即して一定の程度まで普遍的に切り別けられているはずだから、そのようにしてあらかじめ切り別けられた対象を指向対象として持つ概念を指し示すコトバ記号がありさえすれば、異なる言語間での翻訳は可能であるということになる。その記号が、それが属するものと別の言語とは異なったやり方で指向対象を指示していたとしても、コミュニケーションに障碍はないはずだ。実際、日本語話者である私たちが、六甲牧場で草を食むウシに対しても、世界に名だたる神戸

ビーフとして高級レストランにて饗されるステーキに対しても、同じ「神戸牛」という音／文字があてられているからといって両者の識別に混乱をきたすなどということはあり得ない。同様に、虹を３色に見る言語の話者は、それを６色に見る言語の話者が意識のうちでそれらの色を操作的に想起するようには精緻に色彩の違いを意識化できないかもしれないが、感覚器官による認識とその識別は思考ではないから、目前に太陽光線のスペクトルが提示されていたとしたら、その言語の語彙には存在しない微妙な色の違いを、他の言語の話者と同様に弁別可能であるはずなのだ。ではなぜ世界は一つであるらしいのに対して、自然言語の数はこんなにも多いのか。

卑怯な言い方を容赦してもらえれば、われわれは言語学者でも、言語の起源について研究する者でもないという、いわば責任を免除された立場にあるから、ここできわめて粗雑にではあるが、言語によるコミュニケーションの起源についての仮説を提示してみることにする。人と人とのコミュニケーションは、言語を獲得した私たちのコミュニケーションが依然としてそうであるのだから、ましてや言語らしきものを媒介にして取り交わされたであろう原初的なコミュニケーションにおいてはなおのこと、その場限りのアドホックなものであったことであろう。したがって、あるコミュニケーションの場において取り交わされたであろう原初的な「コトバ」も、そのコミュニケーションの参与者にとっては随意的なものなどではあり得ず、逆に「それ以外ではあり得なかったもの」「それでなくてはならなかったもの」、つまり絶対的なものであったことだろう。しかし彼らの間でコミュニケーションが習慣的に取り交わされていくようになるにつれて、元を糾せばそのように絶対的なものであったはずの「コトバ」もやがて、便利な記号へと変化していったのではないか。OK. Here’s the deal. はじめは少数のプレイヤーがローカルなルールでプレイしていた。そのルールは、特に明文化されたものではなかったが、プレイヤー間においては至極当然のもので、それ以外ではあり得なかったものだった。そこへヴィジターが参加してくる。ヴィジターにとってこのローカル・ルールは、時として理解し難いほどに不自然なものであったかもしれない。それでもヴィジターである限りにおいて、少なくともそのゲイムに参加したいという意図がある限りは、当面そのルールに従ってプレイに参加していかざるを得なかったことだろう。しかし、ヴィジターとホーム・ティームとの間にある程度のラポールができあがれば、ヴィジターにもホーム・ティームを巻き込んでのルール改正に携わる正当性、権利が与えられるようになったはずである。そのような段階においてはもはやヴィジターは、外部から見ればホーム・ティームの一員にしか見えなくなっていることだろう。するとその次の段階からは、ホーム・ティーム内においてゲイムのルールを巡っての簒奪戦が繰り広げられていくことになるだろう。しかしゲイムは常に安定したルールのもとでプレイされなければゲイムの体をなさないから、その都度のごとのゲイムにおいてルールは絶対的なものでなければならない。かくして、その社会における「ゲイムのルール」、コトバ記号の用法はドリフティングしていく潜在的可能性をはらみつつ、そのゲイムに後から参加してくる者

（latecomer）にとっては、原理的には「随意的」なものでありながら、プレイヤーにとっては「絶対的」なものとなる。仮にこのような想像にある程度の妥当性があったとすると、コトバ記号の「随意性」とはむしろ「人為性（artificial）」と言い換えた方がいいものなのかもしれない。（以下次号）

注

(1) Birdwhistell, R. L.（1970）*Kinesics and Context: Essays on Body Motion Communication*. Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, pp.157-158.

(2) 奇妙なことに、この一節が非言語コミュニケーションの重要性を説明するために援用される際にはしばしば、（意図的なものなのか、そうでないのかは判断できないが）和書においても英語で書かれた文献においても、「言語によって伝えられるのは30～35％にしか過ぎない（no more than 30 to 35 percent）」と解釈されることが多いようだ。

(3) Tomasello, M.（2008）*Origins of Human Communication*. MA: MIT press.

(4) Ogden, Charles K. & Ivor A. Richards（1923）*The Meaning of Meaning*. London: Routledge & Kegan Paul, Trench, Trubner & Co.［『意味の意味』石橋幸太郎訳（新泉社）、1967（1982）、p56］

(5) Cherry, C.（1957, 1978）*On Human Communication: A Review, A Survey, and A Criticism. Third Edition.* MA: MIT press, p.113.

(6) Ogden & Richards, 前掲書、pp.56-57.

(7) Cherry, C, *op cit*, pp.233-234.

(8) なおチェリーの図には、「オグデン＆リチャーズの意味の三角形」単体では人と人とのコミュニケーションを説明するのには不十分であるから複数の「三角形」間の関係を考慮すべきであるとの批判を受けてのことか、「シグナル」に結合するものとして「他のコミュニケーション参与者からの信号（Signal from other communicant）」、「反応の選択（思考）」に結合するものとして「他のコミュニケーション参与者への信号（Signal to other communicant）」という項目が付け加えられている。しかしこれはやや蛇足であるように思える。「意味の三角形」は記号と事物との関係を表したものであるから、そこに他のコミュニケーション参与者に関する項目がなかったとしても、当然その存在は外延されていると考えるのが自然ではないのだろうか。

(9) 本稿のソシュールに関する記述において参考にした主な文献は以下の通りである。
フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』小林英夫訳（岩波書店）、1940。
フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義　コンスタンタンのノート』影浦峡／田中久美子訳（東京大学出版会）、2007。
丸山圭三郎『ソシュールの思想』（岩波書店）、1981。
丸山圭三郎『ソシュール小事典』（大修館書店）、1985。

(10) 原語であるフランス語のターム［signifié］［signifian］は、それぞれ動詞［siginifier］の現在分詞、過去分詞から作られた語であるということなので、英訳は［signifying］［signified］が適正であるかと思われる。しかしソシュールの記号モデルについて書かれた多くの英語文献は、［siginifier］［signified］という訳語をあてているようだ。その根拠はわれわれには不明だが、少なくてもここでは上記タームの英訳には［signifying］［signified］を採用することにする。

(11) 『一般言語学講義　コンスタンタンのノート』、p94。

(12) なお、「随意性」という訳語は、
佐藤信夫『レトリックの意味論　意味の弾性』（講談社学術文庫）、1996。

に倣った。

⒀ 一般的に使用される［arbitraire/arbitrariness］の和訳は「恣意性」である。しかしわれわれはここで、注⒁で述べたように、佐藤信夫に倣って「随意性」という訳語を採用することにする。佐藤は、「一般に『恣意性』と訳されることになっているこの用語に対して『随意性』という日本語をあてることには、たんなる個人的なわがまま、文字の好み以外になんの立派な理由もなく、したがって、以後それを『恣意性』と読んでくださってもいっこうに苦情を申し立てる筋合いはない」（同上書、p101）などと、（失礼な表現を許していただくなら）しらばっくれている。しかしわれわれには、語意は同じであると想定されるはずの「恣意性」と「随意性」に、あえて定訳ではない後者をあてて使用することに固執する（？）ということにこそ、「シニフィアン」と「シニフィエ」との結びつきとは本当に「随意的」なものなのかを問い直す契機があるように思えてならない。いずれにせよ、この問題については後述することとする。

⒁ 『一般言語学講義　コンスタンタンのノート』、pp.170-171。なお、言うまでもない余計な付言ではあるが、フランス語の［mutton］の意味は、ここにも記されている通り「羊肉」であり、英語の［sheep］の意味は「羊」である。

⒂ 丸山圭三郎『ソシュールの思想』、p.312。